

# 視点

## 一杯のコーヒーから

(財)埼玉県国際交流協会 理事長 加藤ひとみ



コーヒーが好きである。

頭を突き抜けるようなコーヒーの香りに魅せられたのが、小学生の頃だから、相当ませていたらしい子供だったのかもしれない。

原産地エチオピアで、カルディという名前のヤギ飼いの少年が、山中でコーヒー豆を食べたヤギが興奮状態になる事を発見したとか、6世紀頃アラビア半島に伝わり神秘主義修道僧達が秘薬として使ったとか、様々な説があるらしい。確かにコーヒーの覚醒作用・興奮作用・習慣性には思い当たる節がある。そのコーヒー、世界70ヶ国1,000万 haの土地に植えられた150億本のコーヒーノキに実る赤い豆から生まれ、生産者は2,500万人、全世界1日あたりの消費量は20億杯、年間売上高800億ドル以上、先物取引の主要銘柄として石油に次ぐ国際商品と言われる。世界中で愛飲されているコーヒーだが、1990年代以降、続く豆の価格下落で生産者は貧困にあえいだ。

大規模プランテーションのブラジルとは異なり、エチオピアやベトナムなどコーヒー生産者の70%は小規模農家であり、生産地から遠く運ばれる途中、輸出業者・輸入業者・焙煎業者・カフェなど、多くの手を経ることによって、生産者の手元には価格のわずか1～3%しか残らない。だから価格の下落は生産者に最も過酷な結果となるのだ。

現在、アフリカには先進国から多額のODAがつぎ込まれているが、実は、彼ら生産者がもっとフェアな貿易で輸出を1%増やすことができれば援助額の5倍の富を生み出すことが出来る。そのためには生産者と消費者を直接つなげばいい。援助より自立を！と

いうことで、途上国の中でも更に社会的立場の弱い小規模農家や女性などを応援し、仕事の間を増やしていこうというのがフェアトレードの考え方。

有機栽培で高品質、かつおいしいコーヒーを先進国の人に直接届ける、だから生産者には希望と報酬が届けられる。目指すのはそんなフェアな地球のあり方である。

最近ではコーヒーだけでなく「小規模で手間をかけた丁寧なものづくり」の良さであるエコやオーガニックに価値を見いだす先進国の消費者に、おしゃれなデザインのファッションを提供するフェアトレードビジネスも成功し始めた。

フェアトレードで輸入されたインドのオーガニックコットンのTシャツなど、あのハリポッターで有名な女優エマ・ワトソンがデザインしたコレクションを紹介するファッションショーが先日東京で開かれた。

「フェアトレードは地球にも環境にもいい。買うことで自分も生産者も幸せになれる」というメッセージは日本の若者に十分伝わったようだ。

当たり前のことだが、「気の毒だから買ってあげよう」ではなく「おいしいから買う」障害者雇用のパン屋さんも成功している。ビジネスと社会的意義の二兎を追う社会起業家はあちらこちらで活躍し始めた。NPO・NGO・コミュニティビジネス、新しいビジネスの時代の幕開けである。

1杯のコーヒーから地球の裏側が見えてくる。